

---

# Fate/carnival night ~ 祭りの聖戦 ~

ユーリ・ローウェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / c a r n i v a l   n i g h t 祭りの聖戦

### 【Nコード】

N 9 3 2 7 X

### 【作者名】

ユーリ・ローウェル

### 【あらすじ】

第四次聖杯戦争から早十年。今冬木の地に再び聖杯戦争が行われようとする。だが、この戦争は皆さんが知るようなものではなかった…

## 第1戦・セイバー召喚（前書き）

F a t e / z e r oを見ていて思わず書いてみたくなってやっちゃいました（笑）。

ノリはシリアスが全くと言っほど無いと思います。

## 第1戦・セイバー召喚

ここは某県にある冬木市と言う所。この場所はかつて、大きな戦いが四度行われた場所である。しかし、その戦いを知るのはごく一部？なのかはわからない…

四度目の戦いから十年。この冬木の街で大きな戦いが行われようとする…のか？

「おーいイリヤ。そろそろ学校だから朝飯食べろよ」

冬木の街には新都と住宅街と別れている。ここは住宅地に位置しているある一家の出来事。

赤髪の青年、名前は衛宮士郎。彼がこの物語の主人公である。学年は高校二年生、好きな事は家事、ガラクタいじり、弓。

「うん。今なのは見終わったから食べる」

銀髪の少女が居間のテレビをアニメから朝のニュース番組に変える。とテーブルの前に座り、いただきますと言って朝ごはんを食べる。朝食のメニューは白いご飯に味噌汁、納豆、焼鮭といった普通の朝食。

この銀髪の少女の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベル

ン、衛宮士郎の妹であるが血は繋がっていない、学年は小学四年生。好きな物はアニメ、特に魔法少女もの。

ちなみになのはと言うのは皆さんご存知の「魔法少女リリカルなのは」のことである。

「あれ、お母さんは？」

「母さんは…多分まだ寝てると思う。行く時に起こすから今は寝かせておこう」

二人はテレビを見ながら朝ごはんを食べ、食べ終わると食器を片して学校に行く用意をする。

「イリヤ、俺は母さんを起こしてくるから先に行つてくれ」

「うん。行つてくるねお兄ちゃん」

「ああ、気をつけて行けよ」

イリヤを見送ると士郎は自分の母親を起こしに寝室に向う。部屋に入ると布団にいるのはイリヤと同じ銀髪の女性がいた。その人物こそイリヤと血のつながった母、アイリスフィール・フォン・アインツベルンである。

ちなみに士郎は養子なのでこの家族とはでは誰とも血が繋がっていない。

「母さん、そろそろ起きてくれよ」

「んゝあと四時間…」

「いやいや、それじゃあ昼になっちまうよ。仕方ない…」

士郎は布団を両手に持ち、それを一気に引き剥がしたのだ。

「ひゃん…」

「おはよう母さん」

「おはよう…それにしても酷いわ士郎君。私の布団を引き剥がすなんて、そう言う事をするのは好きな女の子にしなさいってあれほど…」

「いやいや…って俺もそろそろ行かないとまずいな。じゃあ母さん、朝ごはんはテーブルに置いておいたから。じゃあ行ってくる」

「ええ。気をつけてね」

士郎も慌てて鞆を取り、玄関をでて走って学校に向うのである。

「なあ衛宮。しってるかい？」

「慎二、なんだよ突然」

「聖杯戦争だよ聖杯戦争、冬木の名物じゃないか？」

「それがどうしたんだよ」

「はあ…衛宮。その聖杯戦争が行われるんだよ、しかも今月に」

学校に着くと、士郎は旧友である間桐慎二と他愛ない話しをする。

「けどなあ…その聖杯戦争の参加条件がまた運なんだよな？」

「そうなのか…おっと、予礼だ」

士郎は正直、聖杯戦争には興味が無かったため、適当に答えて席に着く。

「……藤姉寝坊してるな」

本礼が鳴っているのにも関わらず、担任の藤村大河は教室には来なかった…

途中、あかいあくまとお嬢様の乱闘に巻き込まれながらも何事も無く全授業を終え、本来なら部活に向う筈なのだが本日は急な休みになったので士郎はそのまま家に帰る。

「イリヤ帰ってるのか…ただいま」

「おかえりお兄ちゃん」

「お邪魔してます」

居間からイリヤと黒髪の女の子が現れた、彼女の名前は美遊・エーデルフェルト。学校であかいあくまと乱闘していたルヴィア・エーデルフェルトの義理の妹でイリヤの友達である。

「ああ、ゆつくりしてってくれ。今お茶を入れるから」

士郎はキッチンに向い、お茶とお菓子を用意して二人に渡す。二人が楽しそうに話しているのを見ていて士郎は微笑んでいた。彼は思った、この平和がずっと続くように…

「よし、今日もいいじるか」

夜、士郎は毎日していることがある。それは近所で捨てられているテレビや洗濯機などを修理をすること。彼の将来はそう言う系の職に付く事を考えている。

「正義の味方？それじゃあ家族を養えないだろう。将来は現実を見なきゃだめだぞ」

本日、士郎が直しているのはブラウン管テレビ。今ではもう使われることが殆ど無くなってしまった代物である。

「これで…よし。あとは付くか…」

どうやら直しを得たようだ。あとは動作確認のみで彼はコードをつないで電源を入れる。すると、テレビの画面から急にとてつもない光を発し、士郎はすかさずに目を瞑ってしまう。

光が収まる感じをした士郎はゆっくり目を開けるとそこには一人の少女が立っていた。少女は金髪碧眼、青色のドレスに鎧と言った珍しい格好をしていたがとても美しく見える存在がそこにあった。

「問おう、貴方が私のマスターか？」

「は…ますたー？マスターってなんだ？」

「むっ、私は聖杯戦争のサーヴァントとして召喚されました」

士郎はあまりの出来ごとに頭が回らないでいたが、聖杯戦争と言う単語を今朝慎二に聞いた事を何となく思い出し…

「あゝ朝慎二のやつが言ってたアレか…それで君は一体誰なんだ？」

「私はサーヴァント、クラスはセイバーです。なのでセイバーと呼んでいただければ良いかと」

「俺は衛宮士郎だ。とりあえずその聖杯戦争って奴を詳しく聞きた  
いから家に入ろう」

士郎は土蔵を軽く整理して二人で家の居間に向う。居間ではアイリスとイリヤの二人で洋楽劇場を見ていた。

「あら士郎君。ガラクタイじりは終わったのってあら、セイバーじゃない。久しぶりね」

「えっ…何故あなたがここにいますかアイリスフィール!!」

「母さん、セイバーを知ってるのか？」

「だって、十年前の聖杯戦争。私が参加してたもの、そのセイバーと一緒にね」

「嘘、本当かよ母さん!!」

「あれ、私空気？」

居間のアイリスの姿を見て驚くセイバー。そして、十年前の聖杯戦

争に自分の母が参加していた事を知った土郎は更に驚いていた。

「さあセイバー、そこに座って頂戴」

「はい、では失礼します。それより本当に驚きました。まさかこうして再びアイリスフィールに出会えるなんて」

「私もよ。あつ、この子私と切嗣の子のイリヤよ」

「い、イリヤスフィールです」

「セイバーです。以後お見知りおきを」

三人は居間の畳の上に座っている、ちなみにセイバーの格好はまだ甲冑姿であった。

「ところでアイリスフィール、あの”エミヤシロウ”とは…」

「シロウ君は私達の養子の子なの。ちよつと訳があつてね」

「そうですか…それよりアイリスフィール。私がここに呼び出されたと言う事は再び始まるのですね。聖杯戦争が」

「そうね…あつ、ちょうどいいところね。シロウ君、こっちに来てくれるかしら？」

キッチンで食器を洗っていた士郎はアイリスフィールに呼ばれると作業を中断して三人の所に向う。

「どうしたんだ母さん？」

「そろそろ始まるわよ」

士郎含めて四人はテレビを見る。CMが終わり、何かの特番見たいのが始まる。

『開幕！！第五次聖杯戦争！！』

「…は？」

「あゝそう言えば今日だっけ。たつこが物凄く興奮してたな」

テレビの画面を凝視する士郎とセイバー

「あ、アイリスフィール。これは何なのですか？」

「あら？今日は聖杯戦争のルールやその他の事での特番よ。切嗣これに出てるのよ」

「待って下さい！！聖杯戦争は殺し合いですよ！！それがこんな堂

々と説明をしてもよろしいのですか？」

「あら、何を言ってるのセイバー… あつ、始まるわよ」

そこから聖杯戦争の説明が始まる。1・聖杯戦争に参加する資格はセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七人の内一人をパートナーにする。2・戦い方は色々あり、お題通りの勝負をしなければならない。3・聖杯を手に入れるのはより多く勝てた一組のみ…

「……………これはなんですかアイリスフィール？」

「あら？聖杯戦争よ」

アイリスフィールの言葉で何かに絶望したかのようにセイバーはがつくしとうなだれた。

『異常で説明は終わりだ。明日の十二時、サーヴァントをパートナーにした者達よ、冬木市市民会館に集合だ。明日はこの私、言峰綺礼の開幕宣言を持って聖杯戦争の始まりを告げる、全員集まるように。以上だ』

その後、前聖杯戦争経験者の話しと言う事で切嗣が出ていて士郎はもう声が出なくなっていた。

「そう言う事で明日二人は市民会館に行つて来なさい」

「何でこうなるかな」

「同感です」

夫がテレビに出ている事でハイテンションになるアイリスフィールと逆にテンションが低い土郎とセイバー

「あれ、また私空気が!!」

## 第1戦・セイバー召喚（後書き）

衛宮家は切嗣、アイリ、イリヤ、士郎の四人家族です。セイバーとアイリの食い違いは次回かそのあとに説明する予定です。

次回はあかいあくまさんのおはなしです。

第2戦・あかいあくま、アーチャーを召喚してしまう。(前書き)

勢いで連続投稿です。今回はあかいあくまさんのお話です。

## 第2戦・あかいあくま、アーチャーを召喚してしまう。

冬木市にはオーナーと呼ばれる者がいる、それは遠坂と言う家系で、遠坂は世界の中でも学問に通い世界中で有名な名家である。そして現冬木市オーナーの名前は遠坂時臣であり、今回はその一人娘にしてあかいあくま事遠坂凜のお話である。

「…おはようございますお父様、お母様」

私、遠坂凜は朝滅茶苦茶弱い。それでも欠伸を我慢しながら挨拶をして椅子に座る。既にお父様は朝食を食べ終えて新聞を読んでいた。

「ふむ…そろそろ始まるのだな？」

「何が始まるのですか？」

そうね、紹介しておくわ。新聞を読んでいるのは私の父、遠坂時臣。世界中でも学問と言う分野では有名人であり、ここ冬木市のオーナーでもある凄い人。

「凜。パンは何枚食べる？」

「んゝ二枚で」

キッチンでパンを焼いているのは私の母の遠坂葵、母は父と違い普通の主婦である。

「聖杯戦争だ」

「それって、十年前お父様達が参加したあれですか」

聖杯戦争、私がまだ小さい時子の両親は聖杯戦争と言う戦いに参加していたのだ。その時の様子は私はよく覚えてるわ…

「そうだ、あの時は衛宮にしてやられたのだな…今回こそ…」

そう言う父は新聞を持ってる両手をワナワナとさせている。衛宮って言うのは私と同じ学校の通ってる同級生の父親の事を指している。

「あなた、流石にもう歳ですよ。はい凜」

「ありがとうございます」

「何を言う葵、私はまだ行けるぞ…」

「切嗣さん見たいに若くないんですけら無理はダメよ」

「くう…」

この父、どうしても母には頭が上がらないのがまた見ていて楽しいわね。

「凜、そろそろ学校行く時間よ」

「はい。じゃあ行ってきます」

「気をつけるのだぞ」

本来なら私の学校生活を語る所なのだけれど。ルヴィアっている金髪ロールお嬢様が毎度の事私に絡んでくるのでそれを迎撃、勿論肉体言語で。そんな感じで授業以外の時間を殆ど潰してしまった…途中で衛宮君を巻き込んだ事は今度謝ろう。

「おっ、遠坂。帰りか？」

「そうよ綾子」

帰ろうとした私に声を掛けてきたのは私の親友で悪友の美綴綾子、さっきちらつと出てきた衛宮君と同じ弓道部に入っている。その証

拠に今の彼女は姿は弓道をやる時の姿だった。

「それよりさ、そろそろ始まるんだって。聖杯戦争」

「あら意外ね。綾子がそう言う事に興味を持つなんて」

「いや、弟が毎日うるさくてな。そう言えば遠坂は興味は無いのか？」

「そうね…興味が無いって言えば無いけど、少し気になるわね」

「ま、アレに選ばれるのは本当に宝くじクラスだし気にする事じゃないか。んじゃ私は部活行くわ」

「ええ。また明日」

私は綾子と別れて学校を出る。部活をしていない私は放課後行く所はあまりないが、最近は図書館に行くことが多い。図書館で昔の物語なんて調べるのが今の私のマイブーム。今日借りる予定はアーサー王物語よ…

アーサー王物語を無事借りることが出来た私は家に着くが、珍しく母がいなかった。父は仕事でいないのはわかるが母がこの時間に行かない事は本当に珍しい事だった。いつもは韓国ドラマを見ているあの母がドラマ放置でいないなんて…

「まっ、部屋で本でも読んでますかな」

私は自室に向い、鞆を机の上に置くとカーペットの上に座布団を敷いて、その上に乗っかり本を読もうと本を開いた時…

ズガン！！

「はっわー！！」

いきなり大きな音が家の中でした事で私は驚いて変な事を言ってしまったが。すぐに本を置いて音がした一階に向う。

「音がした方って、お父様の部屋？」

私は父の書斎に向った。書斎の扉は少し開いており、私はおそろおそろドアを開けると書斎は見事に滅茶苦茶になっていたが。私はそれよりも、その書斎の真ん中で座ってる白髪の男を見る。

「やれやれ、こんな手荒い召喚は初めてだ。これはまたとんでもない…」

「もしもし、ここに不法侵入者がいるのですぐに…」

私は冷静になり、携帯と言う現代文明を使って冷静に警察に通報する。

「ま、まてまて。私は怪しい者では無い、私は君に召喚されたサーヴァントだ」

私は一旦携帯の電源を切るとサーヴァントと言う言葉を聞いて少し考える。

「サーヴァントってまさか…聖杯戦争の？」

「そうだ。私はその中のアーチャーのクラスだ」

なんてこった。さほど興味が無かった聖杯戦争の資格を何か意味が分からない内に手に入れてるよ私！！

「はあ…これで私も聖杯戦争の参加者になっちゃったわけね」

「どう言う意味だ？君が聖杯戦争に参加するために私を召喚したのではないのか？」

「そんなのしてないわよ。そもそも私は聖杯戦争に参加するなんてこれっぽちも思ってたわよ。はあ…」

「なん…だと…」

なんか、白髪の男が信じられないような表情をして私を見ているが。それは私がやりたいし、溜息を吐きたいわよ。

「で、では君は聖杯には」

「興味無いわ」

白髪、確かアーチャーって言ったわよね。懲りずに私に聞いてくるが私は即答した。だって、そんな事めんどくさいじゃん。

「なら…私はどうすれば…そうだ。君は令呪はあるのか。たとえば腕とかに何か模様は無いのか？」

しつこく聞いてくるアーチャーに私は両腕や足などを見たが、それらしい模様なんて何処にも見当たらなかった。

「無いわよ」

「そんな…これはどうなっているのだった…私には何が何だかさっぱり…」

アーチャーはその場で膝をついて真っ白になっていた。そして何かぶつぶつと言いだめたその姿は何か物凄く哀れに見えてきた。

「……はあ。わかったわよ。参加すればいいんでしょ」

「むう、それは本当かね？」

「ええ。したくなくても結局は参加しなくちゃいけないものだしね。そうなるとお父様が帰ってきたら詳しく聞かなければならないわ。あ、アーチャー。あなたはここの部屋を直しておいてよ。私はお父様が帰ってくるまで部屋で読書してるから。あつ、私の名前は遠坂凜よ。じゃあ頑張つて」

私はアーチャーに部屋の掃除を任して自室に戻り、読書をする。正直、心を落ち着かせるためになんだけどね。少しして父と母が戻って来たの所で私は一階に行き、サーヴァントを召喚した事を話した。

「成程、今年は娘の凜が参加する事になったのか」

「あら、これで姉妹そろって参加になるわね？」

「それってどう言う意味？」

「桜も召喚したのよ。ライダーを」

桜と言うのは私の一つ年下の妹。ある訳があつて遠坂の家から間桐の家に行ったから名前が間桐桜。部活は綾子や衛宮君と同じ弓道部。そのつながりで衛宮君と出会ったのよね…

「それじゃあ、今二人は…」

「間桐の家に挨拶をして行つた。丁度雁夜君と昔話をしていたのさ」

「それで、アーチャーはどこかしら？」

「お父様の書斎を掃除してますよ」

「そう、じゃあアーチャーには後で伝えるとして」

「凜。明日冬木市市民会館に行くんだ。そこで正式に聖杯戦争の開戦式を行われるからな！！」

「は…はい」

父は異様にテンションが高かった。それは前回の戦争で負けてしまったことから、今回は自分の娘二人が出るとなつて興奮しているのだろう。私のテンションが一向に下がるのが止まらないのは何故だろう？

こうして私、遠坂凜は聖杯戦争に参加する事になった。

第2戦・あかいあくま、アーチャーを召喚してしまう。（後書き）

遠坂家は時臣、葵、凜、桜の四人ですがある理由で桜間桐の家に入ります。

世界の説明ですが、この世界にもちゃんと魔術は存在していますが、ただ、彼らは魔術師ではない事が違いです。なので士郎も凜も普通の高校生さんです。その所はまた詳しく説明するつもりです。

今回は開戦式の話の予定です。一応全員のサーヴァントの登場を予定しています。

### 第3戦・開戦、聖杯戦争？（前書き）

おお、何か勢いが出てきた  
今回は一応、全員のサーヴァントの登場です。

### 第3戦・開戦、聖杯戦争？

衛宮士郎がセイバーを召喚した日、結局切嗣は家に帰ってこなくセイバーはアイリとイリヤと三人で寝る事になった。士郎？彼は男子だから当然一人で寝たさ。

次の日、士郎は朝ごはんを作る。セイバー食べる、セイバー士郎の作るごはんを気にいる、おかわりをする、沢山食べる、イリヤびつくりする。そんな朝食だった。

「セイバー、そろそろ行く時間だぞ」

「はい、私はいつでも行けますよ」

そう言うセイバーの格好は上下黒いスーツをビシッと着こなしていた。

「一瞬、美男子かと思ったぞ…まあいいか」

「シロウ、アイリスフィールとイリヤスフィールは後で行くと言っていました」

「そうか。じゃあ先に行くか」

「ええ」

二人はバスに乗って新都にある市民会館に向う。市民会館に着くと

結構な数の人が集まっていた事に驚く士郎だった。

「どこから入ればいいんだ？」

「シロウ、あそこでは無いでしょうか？」

セイバーが指を指した先にあるのは専用の入り口だった。二人はこの入り口に向うとある人物と出会う。

「よう衛宮。まさかお前が参加資格を得るなんてな。そっちの女性がサーヴァントだな」

それは士郎の親友の間桐慎二だった。

「はい、私はセイバーのサーヴァントです」

「OKだ。ここから中には行ってくれ」

「慎二、お前はここで何をしているんだ？」

「ふつ、それは後でわかるさ。それよりも早く入れよ、すでにお前以外の参加者は全員集まってるからさ」

「ああ、わかった。行こうセイバー」

「はい」

二人は慎二の横を通り、市民会館の中に入って行く。中は一本道になっていて二人はその道をまっすぐ進み、扉を開けて中に入ると…

『さあ、最後の参加者の登場です』

二人はいきなりスポットライトを浴びて注目される。

『両名、あちらに行ってもらおう』

司会者らしき神父に言われた二人は人が集まってる場所に向くと士郎はその中にいる人物達に驚く。

「これが参加者なのかって…うえい。何で遠坂や美綴、桜がいるんだよ。しかも端にいるのは葛城先生じゃないか」

「え、衛宮君こそ。何でここにいるの？」

「いや、遠坂や間桐だけかと思ったけど、まさか衛宮までいるとはね」

「せ、先輩。こんにちはです」

学校での知り合いがまさかここで遭うとは思わなかっただろう、この四人、教師含めると五人。

『では、そろった所で各自、自己紹介をさせていただこう』

司会者の神父は話しを進行させ、最初の二人組に近付く。

『まずはランサーの組から紹介しよう、では』

司会者は持っていたマイクを二人の人物に向ける。一人はメガネを掛けた男性で如何にも型物といった感じの人物だった。

「葛城宗一郎。教師をしている。科目は社会科」

「私はキャスターよ。ちなみに宗一郎さまの嫁ですわ」

『彼女の真名はメディアです。それにしても、リア充は爆発をすればよろしいかと』

司会者がイチヤイチヤしてる二人に対してそう言い、隣の組にマイクを向ける。一人は女性でが長身でセイバーと同じくスーツを着ていた。

「私の名前はバゼット・フラガ・マクレミッツ。ランサーのパートナーであり今現在、就職活動中です」

そして、司会者は隣にいる青いタイツ見たいな格好をしている男性に向ける。

「……おい、なんなんだよこれ」

「ランサー、自己紹介を」

「チツ…ランサーだ」

男は明らかに不機嫌そうな態度で答えた。

『ちなみに彼の真名はクー・フリーンです』

「おいテメエ！！何勝手に人の真名を言ってるんだああ」

『では、次の組』

ランサーは滅茶苦茶司会者にキレるが、司会者は華麗にスルーして隣の組にマイクを向ける。

「えゝ私は美綴綾子です。普段は至って普通の学生をやっています」

「拙者はアサシン。真名は佐々木小次郎である」

美綴は普通に自己紹介をしてが、隣にいる着物姿の男はいきなり真名を答え、その真名に会場は驚いた。

『これは何と、日本人なら誰もが知っているあの佐々木小次郎。これはまさに素晴らしい!!』

「拙者はそれほどでもござらぬ」

司会者は表情は変えていないが声が興奮するのが分かる。そして隣の組にマイクを向ける。

「遠坂凜です。私もお隣にいる美綴さんの友達で同じ学校に通っている普通の学生です」

「アーチャーだ…」

『これは何と、遠坂と言うと前戦争に参加していた遠坂時臣氏の娘さん。私もこの身、前戦争に参加していたのですが遠坂氏はかなり手ごわかったです。これは期待できそうですね』

説明する司会者に対して明らかにテンションが低いアーチャーだっ

た。

『それでは次の組の方』

「間桐桜です。私も前のお二人と同じ学校に通っている普通の学生です」

「ライダーです。趣味は読書と散歩で、真名はメデューサです」

『これはまた、前戦争に参加していた間桐の家からできました。これもまた期待が出来るでしょう。では次の組』

司会者が遂に士郎とセイバーの組に行き、マイクを二人に向ける。

「俺は衛宮士郎です。俺も普通の至って普通の高校生で、得意な事は家事と機会いじりです」

「私はセイバーです。これは私も真名を言った方がよろしいのか…私の真名はアーサーです」

『これは！！まさか前戦争優勝をしたセイバーことアーサー王。そして、衛宮切嗣氏の御子息と言う組み合わせ。これは中々に期待ですな』

司会者はそう言々と中央に戻ろうとするが。

「待て。まだ我を忘れてわいないか」

突如、会場内に男の声が響く。会場内は一斉に声がした方を向く、そこにいたのは髪の毛金髪、鎧も金色と百式位金色の男が立っていた。

「アーチャー…あなたが何故ここに…」

セイバーは金ぴかに対して”アーチャー”と言うが…

「久しいなセイバー。今回我はバーサーカーのランクで召喚されたさあ。我にも自己紹介をさせる。マイクをよこせ言峰」

金ぴかはいきなり現れては我がもの顔で歩いて行き、司会者のマイクを取って話そうとするが…

『バーサーカーよ、久しいな。だが、お前にパートナーはいるのか？』

「我にはそのような物は必要は…」

『そうか？だが、この戦いにはパートナーがいなければ勝ち残れないぞ』

「くう…確かに…」

司会者の発言に、六人のサーヴァントは首を傾げるが、バーサーカーだけは知っているようだった。知るぞと知るなら分かるだろうが、あの金色が本当に苦い表情をだしているのだ、あの唯我独尊の男が…

『ふっ…安心したまえ。今回は特別にこの場でお前のパートナーを決めよう…』

司会者は観客席をじっと眺め、ある方向に指を指す。

『ではそこのお二人。こちらに来てもらおう』

司会者に指された二人はおどけながら司会者の所に行く。その二人を見た士郎は声を上げなかったが心の中で驚いていた。そう、選ばれた二人と言うのは…

『では自己紹介をしてもらおう』

「い、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです…」

「美遊・エーデルフェルトです…」

士郎の義理の妹、イリヤスフィールとその友達の美遊だった。当の二人は何が何だかわからないように表情から見ても分かるように混乱している。

『これで七組が出そろいました。これより私こと言峰綺礼が聖杯戦争の開戦を宣言しよう』

司会者の言峰綺礼が宣開戦の言する。ここにて、第五次聖杯戦争が始まったのである。

『では、ここで今聖杯戦争のルールを説明する所だが、説明は彼にしてもらおう』

すると、そこに現れたのは先ほど士郎と出会った間桐慎二だった。

「おい桜、何で慎二がここにいるんだよ？」

「本当は兄さんが参加する予定だったんですけど。兄さんは司会進行役をやる事になって私が参加することになったのです」

士郎は近くにいた桜に理由を尋ねるが、まさかの真実にもう彼は言葉が出てこなかった。

「えー皆さん初めまして。僕の名前は間桐慎二です、今日これからこの聖杯戦争の司会進行役をやらせていただきます。ではまずはルールの説明を…」

慎二が自己紹介をして、聖杯戦争のルール説明が行われる。

- 一・聖杯戦争の戦いは原則一組対一組で行うこと
- 二・競技内容は各種ランダムで決めること
- 三・戦い中の第三者の介入を禁止する

「厳密にはこの三つ。次は勝敗に関して」

- 一・戦いで勝者したチームに二点、敗者にはゼロ点、引き分けの場合両組に一点を与える
- 二・点が高い上位四組が決勝に進出が出来る

「以上です。何か質問はあるか？」

慎二は紙を見ながら説明をして、終わると会場を見わたす。参加者のマスター組は特に質問はないようだ（いまだに現状に理解できていないもの二名）。だが、サーヴァント達は何か言いようのない表情をしている者が多かった。

「ないようだな。よし、では早速明日の対戦組と競技内容を発表しよう。言峰神父」

司会者の言峰はよくくじ引きを引く時に使う箱二つ持って、真ん中に穴が開いている所に手を入れて二枚の紙を取る。

「ふむ、明日の戦いは衛宮士郎&セイバー対バゼット&ランサー。そして競技内容は…」

今度は違う箱に手を入れ、一枚の紙を取って読みあげる。

「神経衰弱だ」

開戦式が終わると、バゼット&ランサー組は早速何処かに行ってしまったが、残りのメンバーは外に出て集まっていた。

「それにしても俺初戦か… ってそれよりも本当に驚いたぞ。お前達  
が選ばれてたなんて」

「それはこつちの台詞よ衛宮君。よりもよって貴方が参戦するな  
んて」

「私ですよ。でも私、負けませんよ」

「おつ、間桐も言うようになったじゃん。まあ、私も負ける気ない  
けどね」

「綾子、アンタ割と乗り気ね」

「そりゃあ勝てれば良い事に越した事は無いからね」

割とのんびりした感じで会話する四名、だが、その隣のサーヴァン  
ト四名は只よらぬ空気を出していた。

「あなた達も聖杯の召喚に呼ばれた筈です。なのにどうして…」

「それは私も知りたい。何故聖杯戦争がこのようなふざけたような  
事になっている。セイバー、君は確か、前の聖杯戦争に参加してい  
たと聞いた。前回もこれと同じ内容だったか？」

アーチャーの表情は真剣そのものだった。

「いいえ。私が参加した前回の聖杯戦争はちゃんとした戦いでした。このような事は一切ありませんでした」

「むっ、それでは先ほどの説明とは矛盾するのではないか？」

アサシンは矛盾に気づきセイバーに問うが、その問いに答えたのは別の人物であった。

「そこにいるセイバーは確かに前回も参加してた奴に間違いは無い。ただ、中身が違つと言う事だ」

「それはどう言う意味ですか”アーチャー”」

それは金色のバーサーカーであった。バーサーカーは相変わらず金ぴかの鎧を着ているし、太陽の光で余計に眩しくその場にいる皆は目をそむける。非常に迷惑な奴であった。

「そう言う意味だ。これは我様の考えだが、お前達は本来別の次元の聖杯戦争に参加する予定だったのではないのか？それが何らかの理由でここの聖杯戦争に召喚された…これが我の考えだ」

「そんな非常識な…」

「さて、その根拠は何処にある？」

「知らん、俺様の考えた。まあ、要するに俺様含めて皆間違いで召喚されたと言うことではないか？」

バーサーカーの発言にセイバーとアーチャーは本当の絶望の様にその場で膝を付いた。

「間違いで召喚…これでは私の夢は…」

「くっ…私は…」

今のこの二人はとても哀愁が漂っている。傍から見るとサラリーマンがリストラした感じに見えなくもなかった。一方、ライダーとアサシンはと言うと…

「あなたはこう思っているのですかアサシン」

「拙者は綾子殿に付いて行こうと思っている。そなたはどうなのだ、ライダーよ」

「私は特に問題は無いです。それに私はあそこの二人の様に本来の聖杯戦争にそこまで思入れはありません。なので私はこの聖杯戦争でも十分かと」

「拙者もよ。まあ、セイバーとは戦ってみたいと思ったのだが、それはまた次回の機会にしよう」

アサシンとライダーは割とこの聖杯戦争を受け入れて談笑をしていた。

「ねえバーサーカー。これからどうするの？」

金色バサカに話しかけて来たのはパートナーになってしまったイリヤスフィールだった。その隣にはなんて話そうか悩んでいる美遊もいた。

「様我に付いて来れば自ずと勝利はやって来る。だから案ずるな二人よ、ふはははは。気分も良い、何処か行くぞ二人よ」

「あつ、ちょっとお兄ちゃんに言ってくるから待ってて」

結局、金色の迷惑な人はイリヤと美遊を連れて何処かに行ってしまった。

「アーチャー帰るわよってうわあ、アンタ何絶望したー見たいな感じになってるのよ。帰るわよ」

「セイバーもほら、帰ったら旨い物作ってあげるから」

「本当ですか？」

士郎と凜はそろそろ帰るため、自分のサーヴァントの元に行くが二人はああなってる。凜は無理やりアーチャーの腕を引っ張っている、対して士郎は旨い物を作るとの一言で復活した。この娘は美味しい物には目が無いのだろう。きっとそうに違いない。

「ああ、だからいつまでも落ち込んでないで帰るぞ」

「アンタもアーチャー。じゃなかったら川に叩き落とすわよ」

「それは勘弁してほしい物だな」

凜の脅迫にアーチャーは渋々復活。

「それじゃあ皆、私達は明日から敵同士」

「ええ。負けませんよ私」

「俺もだ。やるからには勝ちたいしな」

「そうだな。まあ、それ以外は今まで通りなんだけどね。んじゃ私そろそろ行くわ。アサシン。行くぞー」

綾子がアサシンと家に帰ると凜、桜もそれぞれサーヴァントを連れ

て家に帰って行った。

「さてとセイバー。改めて言うがこれからよろしく頼むぞ」

「ええ、手違いで召喚されたと言え私は騎。この身、何があっても貴方の身を守りますマスター」

「ああ、頼んだぞセイバー」

二人はお互い右手を差出て握手をする。

「では、私達も戻りましょう」

「いや、飯の材料を買ってから帰ろう」

二人も市民会館を後にする。こうして開戦式は何事も無く終えた。そして、明日から聖杯戦争の本格的な戦いが始まるのだった…

ちなみに、葛城&キャスターはランサー組より早く家に帰っていた。

「まさか、僕達の子供たちが参戦するとは思わなかったよ」

「私もだ。だが、こんどは勝たせてもらうぞ衛宮」

「悪いが、士郎もイリヤも僕の子達、そう簡単にはいかないぞ遠坂」

「それはこっちの台詞だ。凜と桜も私の子、簡単に勝てると思うなよ」

会館から少し離れた所で昨日家に帰ってこなかった衛宮切嗣と遠坂時臣が言い争っていた。

「相変わらずですな二人とも」

そこに現れたのはさっきまで司会者を務めていた言峰綺礼だった。

「親バカもいいが、程々にした方がいい。それより今夜、久しぶりの一杯どうだね」

「ふっ、いいだろう」

「私も構わん」

大の男三人はその足で冬木の酒場に向って歩いて行った。

「もう、全く男の人つたらねえ。葵さんもそう思わない？」

「そうね。でも、あの人達はあの人達なりに気が会うんですよ。それより私達も何処かに行きませんか？」

「いいねーたまにはパーと買い物したいし」

「じゃあ行きましょか」

### 第3戦・開戦、聖杯戦争？（後書き）

ここでマスターとサーヴァントの組み合わせ

セイバー＆衛宮士郎

アーチャー＆遠坂凜

ランサー＆バゼット

アサシン＆美綴綾子

ライダー＆間桐桜

キャスター＆葛城宗一郎

バーサーカー（金色）＆イリヤ、美遊

違いはアサシンにちゃんとしたマスターがいる事。ヘラクレスさんはルールが守れない為、金色さんが代わりにバーサーカーのクラスになる。

それにしても今更ながら勢いでやっちゃったな〜て思っています。

今回は日常で、それを挟んでセイバー組みとランサー組の戦いの予定です。

#### 第4戦・一日の終わり（前書き）

何気なくセイバーと切嗣を会話させて見た回です。

## 第4戦・一日の終わり

開戦式が終え、家に帰ってきた土郎とセイバーは特にすることも無く居間でお茶お飲みながらテレビを見ていた。時間が立ち、そろそろ日が落ちる位になった時間。

「ただいま」

イリヤの元気な声と共に声の主は居間に入ってきた。

「おかえりイリヤ、それにしても驚いたぞ。お前がマスターになっちゃうなんて」

「うん。ハッキリ言って予想外だったよ」

「ところでイリヤスフィール。アーチャ：いえ、バーサーカーは何処に？」

「えーと。何か『今から前のマスターに会いに行く』って言うてどっか行っちゃったよ」

イリヤのパートナーであるバーサーカーは前回の戦争では遠坂時臣にパートナーとして参戦していた、なので彼は恐らく時臣の所に行

っている。

「はあ、疲れたよ。あれから私と美遊は色んな所を連れ回されても  
うへとへと」

「その前に手を洗って来いよ」

「はい」

イリヤは洗面所にて手を洗いに行き、その間に士郎は晩御飯の準備を始める。

「シロウ、今日のご飯は？」

「明日は初戦だから、カツ丼にしようかと」

士郎が台所で料理を始めてから三十分、その間暇な二人はテレビで魔法少女リリカルなのはA、Sを見ていた。

「このシグナムと言う人物と手合わせを試みたいものですね」

「いやいやセイバー、これアニメだからね……」

二人がアニメを見ている間、玄関の方からドアが開く音がした。

「ただいま。ふう、久しぶりのショッピング楽しかった」

「お帰り母さん、親父と一緒にじゃなかったのか？」

「切嗣は男三人で昼間っから飲みに行っちゃったわよ。だから私は葵さん二人で買い物してたのよ」

「そうか…後少しでごはん出来るから」

士郎は出来かけの料理を作り台所に、アイリは荷物を自分の部屋に置いて来てイリヤとセイバーの隣に座る。

「ねえお母さん。お母さんが参加してた戦いつてどんな感じだった？」

「そうね〜とにかく大変だったわよ。セイバーにも一言、あまり力み過ぎると本来の力は出せなくなっちゃうから気遣いしないでリラックスするのよ」

「それはどう言う意味ですかアイリスフィール？」

「ふふふ、それは実際に戦いが始まれば分かるわ。だから忘れないでね」

「はい。心に刻んでおきます」

「ごはん出来たぞ」

士郎の言葉で三人は食べる準備をしてテーブルの前に座り。

「「「いただきます」「」「」

食事の光景はセイバー美味しい、おかわり、沢山食べる、イリヤびつくり、士郎台所とテーブルを往復、アイリ微笑む、セイバーそれでも食べる…

「「「ごちそうさま」「」「」

「お粗末さまでした」

「シロウのご飯はとてもおいしかったです」

「そう言われると照れるな〜っと、食器を片してくるよ」

士郎は照れ隠しと言わんばかりにセイバーのから離れて食器片しに入る。

「た、ただいま」

玄関からなにか今にも死にそうな声が聞こえてビックリするセイバー、対して他の三人は余り驚かずに冷静にしていた。

「親父か…セイバー、ちょっとこっちに来てくれ」

「わ、分かりました」

士郎は作業を一旦中止させてセイバーと玄関に向う。玄関にいたのは酒の匂いを発散させ、床で今にも眠りそうな衛宮切嗣がそこにいた。

「親父、かなり飲んだろう？」

「えっ…シロウ。これは一体？」

セイバーからしてはこんな衛宮切嗣の姿を見たことが無かったので言葉が上手く出ないでいた。

「ああ、親父。酒は弱いのにいつも限界以上まで飲んで来るんだよ」

「ぼくわあゝよわくないぞ」

「はいはい、セイバーそっちから担いでくれ。俺はこっちから担ぐから」

「わかりました」

士郎とセイバーは切嗣を両方から担ぎ、切嗣の部屋まで運び、そのまま布団に入れた。

「親父、今水を持ってくるから待ってろ」

士郎は台所に水を取りに行く。

「セイバー、お前にこれをあげよう」

切嗣は右手に持っていた袋から洋服を取り出した。セイバーはそれを受け取ると両手で広げて服を見る、それは白のブラウスに青色のスカートとセイバーが着たらとても似合いそうな服であった。

「さっき、ときおみから貰った奴だ。ぼくはこれが君に似合うと一目で感じたさ。だからこれをきみにあげるよ」

「あ、ありがとうございます切嗣」

「いいんだ…ZZZ」

切嗣はそのまま寝てしまい、士郎が来た時には完全に熟睡をしていた。

「セイバー、その服は？」

「今さっき切嗣に貰った服です」

「へえ、その服、セイバーなら似合うよ絶対に」

「そ、そうですね…」

士郎の言葉に照れるセイバーは顔を少し赤らめていた。

「さて、親父寝ちゃったんなら食器洗いの続きをするかな。あつ、風呂沸いたから」

「わかりました」

その後は何事も無く時間が過ぎて一日が終わっていた。ちなみに、セイバーがお風呂から上がった後、切嗣から貰った服を三人が見ると…

「まあ、可愛いわよセイバー」

「本当、何処かのお嬢様みたい」

「ああ、スーツ姿も凛々しいがセイバーはそう言った格好の方が似合ってるぞ」

セイバーの洋服姿を見た三人は絶賛していた。

#### 第4戦・一日の終わり（後書き）

切嗣が持ってきた洋服はStay Nightの普段着です。ってかそれ以前はずっと黒スーツ姿のままだった。

次回は開幕戦の話です。一体彼らはどうやって神経衰弱を戦うのか…

俺、うまく書けるかな？

## 人物紹介（前書き）

戦争が始まる前にサーヴァントの能力を紹介、ついでにパートナーもです。

## 人物紹介

### 人物紹介

#### 衛宮士郎

原作の主人公でありこの小説の主人公でもある。原作では「正義の味方」を目指して頑張っているが本編では目指していない。なので歪みなどもない。

得意なのは家事全般とガラクタいじり等は原作と同じ。部活動は弓道部。

#### セイバー

衛宮士郎が召喚したセイバーのサーヴァント。原作のヒロインであるがここではどうなるか分からない。

前回の第四次聖杯戦争で衛宮士郎の父、衛宮切嗣のサーヴァントであった。

だが、この世界はセイバーが経験した第四次戦争とは世界が繋がっておらず未だに生きているアイリスフィールを見て驚いたりしている。

乗り物に関しては元々の騎乗スキルのお蔭で神獣クラス以外のなら乗りこなせると言う余り意味のないスキルのお蔭で以外にドライブ等をする

スキル・運動B、幸運AA、直感C、頭脳D

固有スキル・腹ペコ。単に燃費が悪い、デメリットでしかない。

騎乗。神獣クラス以外のなら何でも乗りこなせる。それはガンダムであろうとISであろうと…

#### 遠坂凜

原作のヒロインの一人。冬木市のオーナーである遠坂時臣の娘、学校では優等生であるがルヴィアとよく乱闘している。それが学校では名物になっていたりしている。

原作では魔術の家系であったが本編では一般の家系で魔術とは無縁。よって当初は聖杯戦争にはあまり興味を持っていなかった。

#### アーチャー

かつてに遠坂邸に召喚してきた白髪の人。前世は色々とあるが戦争自体おかしくなっているため彼は一体どうなってしまうのか誰も分からない。

スキル・運動AA、幸運G、直感AA、頭脳C

固有スキル・主夫。家事全般のレベルが世界でもトップレベル。戦争に意味はあるのか？

#### 美綴綾子

原作ではモブキャラに等しい扱いだが。本編ではメインキャラの一人に出世。士郎や慎二、桜と同じ弓道部で部の部長。腕は士郎と同クラス。遠坂凜とは親友で悪友で好敵手である。

#### アサシン

真名は佐々木小次郎。原作では門番担当だが本編は自由に動き回るので。パートナーである綾子に強い信頼感を持っている。

スキル・運動 A A、幸運 C、直感 A A、頭脳 D

固有スキル。剣気。まさに剣の達人、それは幻の刃を生み出す程の強者。今回では使いどころが難しい…

間桐桜

原作のメインヒロインの一人。設定が一番思い娘であるが芯がしっかりしている。遠坂凜の二つ下の妹で、原作とは違い、蟲なんて入られていないため髪の色は凜と同じ黒色。部活は義理の兄の慎二と同じ弓道部。そこで士郎や綾子と出会う。

ライダー

真名はメデューサ。原作では普段は魔眼を封じるために魔眼殺しのメガネを掛けるが、本編はそう言った特殊技能が一部無くなっている。なので伊達メガネである。趣味は読書、乗り物のドライブ。いつかはセイバーとカーチェイスをしたいと思っている。

スキル・運動 A、幸運 C、直感 C、頭脳 A A

固有スキル・読書。色んな本を読んでいるため知識が豊富。今回の戦争では大いに活躍できるだろう。

葛城宗一郎

見た目寡黙そうであるが実際も寡黙な人物。それでいて教師をしている、科目は社会科。

キャスター

真名はメディア。けっしてBBAとは言ってはいけないよ、これはお兄さんとお約束だ。

スキル・運動G、幸運D、直感B、頭脳S

固有スキル・主婦。中の良い主婦の絆はとても強い。絆は重要だね。

バゼット・フラガ・マクレミッツ

通称ダメットさん。名前の通り職なしで就職活動をしている。

ランサー

真名はクー・フリーン。原作ではそんな役回りが多いが中々のナイスガイ。

スキル・運動AAA、幸運D、直感S、頭脳E

固有スキル・ナイスガイ。ここぞと言う時自信最大の力を発揮できる。兄貴かっこいいぜ！！

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

原作だとかかなり重要な人物。本編だと普通の小学生、学年は四年生で歳は十歳。表には出さないが義兄の士郎にラブである。

美遊・エーデルフェルト

イリヤの親友でルヴィアの姓を名乗る少女。人見知りがあるが、見た目がとても可愛いので同学年の子たちからはとても人気がある。

バーサーカー

真名はギルガメッシュ。前回の第四次聖杯戦争も参加しており、その時は時臣のパートナーであった。その時のクラスはアーチャー。古代英雄王と名乗る彼は金が好き。髪の毛、鎧も金色にしているが、日中金色の鎧で出歩くと日光が反射してとても眩しくなりとても迷惑を掛けているが自信は全く気にしていない。

スキル・運動B、幸運S、直感F、頭脳D

固有スキル・コレクター。全てのものを集めないと気が済まない。

黄金律。生まれ出る幸福に恵まれる。これで資金調達

だ！！

## 人物紹介（後書き）

### スキルの紹介

運動・まさに体を動かす時の能力。高いほど運動系の競技に強い。

幸運・運、それは勝負において重要なファクターになる。ここぞと言う時、運が高いと何か起こるかも。

直感・この能力が高いと感が冴えたりといろいろと勝負を有利に働く事が出来る。

頭脳・やはり知識は重要。何も知らないより知っている方が良いに決まっている。

スキルはこんなものですね。固有スキルの方はもうネタが大半なのであまり気にはしないでも大丈夫です。

能力は随一更新していきます。

## 第5戦・聖杯戦争開幕戦（前書き）

なんか野球のタイトル見たいになっちゃいましたね。それと自分、エクシリアとFateの小説も書き始めました。よかったらそちらも読んで下さるとうれしいです。

## 第5戦・聖杯戦争開幕戦

さて、一晩明けて次の日。今日は聖杯戦争初戦のセイバー組対ランサー組の戦いが行われる。ちなみに会場は朝、士郎の携帯にメールが届いてあり、場所は衛宮邸にある道場で行う事になった。

「なんか緊張するな」

「安心して下さいシロウ。どんな戦いと言え、私がいれば勝利は確実です」

「ああ。頼もしいパートナーだ」

二人は会話しているが、実はランサー組待ちで二人は居間でのんびりと朝の天気予報を見ているのだ。

「昨日は済まなかったね。二人とも」

「親父、大丈夫なのかよ」

「ああ…まだ頭が痛いけどね…どうしたんだいセイバー？」

「あの…えっと…」

原作を知ってる方ならお解りだろうと思うけど、本史でのこの二人の関係は最悪、かわした言葉は三度しかないほど冷めきっていた物で、セイバーはどう対応していいのか分からないかった。

「セイバー。そう力む事は無い、君は”戦場の女神”なんだ。だからリラックスしていれば問題は…無いと思うな」

「親父、そこは言いきつてくれよ」

「”戦場の女神”」

「ああ、すまない。君は僕が召喚したセイバーとは少し違ったんだ。でも、僕が召喚したアーサー王と同じだろう。なら大丈夫、それは僕が保障しよう」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「じゃあ僕はちょっと出かけてくるよ。二人の戦いが見れないのは残念だけど頑張ってくれ」

切嗣は何気にセイバーの正体と言うが士郎はスルー、そして切嗣は支度して家から出て行ったのである。

「あ、あのうシロウ。今切嗣が言った私の正体…」

「ん？アーサー王だろ？でもまさかあのアーサー王が腹ペコ少女だったなんてな。これは中々ネタになるよな」って思ってた」

「シ〜ロ〜ウ〜私は腹ペコ王ではありません」

セイバーはうわんうわん泣きながら士郎をゆするが、士郎はひたすら笑っていた。

「そついえば母さん達、終わったかな？」

「どうぞしよ。少し見てきます」

落ち着いたセイバーはアイリ、イリヤがいる所に行く。今二人がいる場所は道場、何故二人が道場に行っているのかと言うと二人は戦いの準備をしているからであつた。

ピンポン

「はい、今出ます」

士郎は玄関に行き、ドアを開けるとそこにいるのは。アロハシャツに青のデニムにサンダル姿のランサーともう夏間近なのにスーツを着ているバゼットがいた。

「初めまして、バゼットです」

「あつ、衛宮士郎です。今準備をしていますので家に上がって待っていて下さい」

「では、お言葉に甘えて。失礼します」

バゼットは士郎の横を通り過ぎ、靴を脱いで家に入って行く。

「よう坊主。俺たちも初顔合わせだったな。俺はランサーだ、そして今日は勝たせてもらうぞ」

「いいや、勝つのは俺だ。中に入ってくれよ」

「言っじゃねえか坊主、気に入った。邪魔するぜ」

ランサーも家に入り、士郎も最後に扉を閉めて中に入る。二人が居間で座ると士郎は素早くお茶とお菓子をだして二人をもてなす。

「あ、ありがとうございます」

「にしても。今回のつてか、何なんだ、この戦いはよ。俺が知る聖杯戦争じゃねえしよ」

「俺もセイバーに聞いたよ」

「確か七組のマスターとサーヴァントの殺し合い…恐ろしいですね」

「俺としちゃ、この戦いの方が逆に怖いんだがな」

ランサーはズズズとお茶を飲みながらそう言う。

「で、坊主よ。ぶっちゃけ、コイツとは戦いたくねえて奴はいるか？」

「そうだな…俺はあのライダーだな。なんとなく」

「ほお…坊主、中々だな。実は俺も同じ考えだ」

「どうしてですかランサー？」

お菓子を丁寧に食べるバゼットがランサーに質問する。

「本来の聖杯戦争でセイバー、アーチャー、ランサーって言うのが言わば強キャラって言う立位置なんだ。だが、今回に限ってはそうじゃねえと俺は見た」

「それはどう言う意味ですか？」

「昨日のあの場で俺は一通り全員のサーヴァントの能力を見てみたんだ、おそらく他のサーヴァント達もやっているだろう。で、感想としちゃな、本来の聖杯戦争なら間違いなくバーサーカーがぶつちぎり、次にセイバーにと続いてたんだが…」

「だが？」

「今回のに当てはめて見たら、ライダーの能力が一番だった、次にアサシンと…こりゃ一体どうなってるんだって思ったよ」

ランサーはやれやれと言った感じで諦めたようにその場でごろんと横になる。

「士郎君は何故ライダーが強敵と感じたのですか？」

「何か見た感じ、何でも卒無くこなせるって感じがしたんだ」

「成程、そうですね」

「お兄ちゃん、準備出来たよってうわぁ」

どうやら準備が終わったようで、それを知らせに来たイリヤが今に来るが。バゼットとランサーを見て驚いてしまったようだ。

「うし。嬢ちゃん、早速案内してくれ。行くぞバゼット」

「ええ、行きましょう」

「じゃあ。私について来て下さい」

ランサーとバゼットはイリヤの後を追って道場に向かって行く。

「それじゃ、俺も行くか」

士郎は片づけて戦場になる道場に向かって行く。

「失礼します」

バゼットとランサーは道場の中に入る。

「あら、いらっしやい。準備はもう出来てるわよ」

その後にセイバーと士郎も道場に来てお互い、両組対面させながらパートナーを隣に座らせる。

「じゃあトランプまき散らすね」

イリヤが真ん中にトランプをまき散らし、アイリの隣に立つ。

「じゃあ、始めちゃってね」

すると、両組は神経衰弱を始める。最初は両組中々カードが合わないでいたが。

「ふっ…そこだ。次は…そこだ、こんどはそこだ!!」

ランサーの直感が冴え、連続して四組八枚のカードを奪う。

「凄いですランサー」

「へっ、これで俺達の勝ちだぜ」

五回目でランサーはミスをするが、めくったカードの絵柄は既に前に引いているのを確認していた。それにまだ士郎とセイバー組は四枚しかカードを取れていなかった。ここでカードを取れないとバゼットのターンで更に猛攻が始まる。ここは何としても取りたい所だった。

「……行きます」

セイバーは同時に二枚のカードを表にすると絵柄は同じだった。

「次です！」

さらにセイバーはカードをめくり、絵柄は同じだった。

「更に次です」

またまた絵柄が同じだった。

「まだまだ行きまー!!」

またしても絵柄は同じだった。

「ちょっとお前、どんだけ鋭いんだよ」

ランサーさんそれは違います。彼女はただ運だけで引き当てているのですよ。

「マジかよー!!」

そう言っている間にセイバーはあれよあれよとカードをめくり、遂に一人で全てのカードをめくり終わってしまった。

「やりましたシロウ」

「あ、ああ凄いなセイバー」

セイバーの顔をとても満足していた。

「くう…俺達の負けだ」

「仕方ありませんランサー、次頑張りましょう」

ガツクリするランサーを諷めるバゼット。

「はい。この戦いは士郎君とセイバーペアの勝ちね。あつ、この戦い内容は後で動画に上げておくからね」

アイリの手にいつの間にかビデオカメラが握られていた。

「士郎君。今日は負けましたが、次は負けませんよ！」

「ああ。坊主、セイバー。今度は負けねえからな」

バゼットとランサーはそう言いながら衛宮家を出て行った。

こうして、士郎の初戦はセイバーの圧倒的な引きによって勝利を勝ち取ったのだった。

## 第5戦・聖杯戦争開幕戦（後書き）

初戦は十代君ばりのチート引きでセイバーが勝ちをとりましたね（笑）

次回はたぶん遠坂の話の予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9327x/>

---

Fate/carnival night～祭りの聖戦～

2011年11月4日14時20分発行